

Journal of Heropin Studies

Vol.44, No.3 | 特集：ヒロピン学の新天地

## ヒロイン敗北率上昇の真因に関する批判的考察

分類学的戦術説の因果倒錯を超えて：

生命力根源部位脆弱性仮説と覇者傲慢症候群の統合的提唱

*A Critical Examination of the True Causes of Increased Heroine Defeat Rates:  
Beyond the Causal Inversion of Taxonomic Tactics Theory — Proposing the VOLV Hypothesis and Dominant  
Complacency Syndrome*

神崎 楓花 (かんざき ふうか)

東京都立サブカルチャー総合大学 ヒロピン学研究科 比較ヒロピン学研究室

\* 連絡先著者：kanzaki.fuka@tmu-subculture.ac.jp

受理日：2025年6月15日 掲載決定日：2025年8月3日

利益相反：なし 研究資金：東京都立サブカルチャー総合大学 学術振興基金（課題番号：JSC-2024-0712）

※本論文は第44回ヒロピン学会年次大会（招待講演「天動説を超えて」）を元に大幅加筆・修正したものである

## 要旨

本論文は、近年の統合悲嘆機構デスペラード ヒロイン対策総合研究所（IHCRI）が発表した一連の論文——とりわけ暗黒・蛍火（213）の作戦成功率分析、暗黒（214）のヒロイン分類学序説、および暗黒・深淵蜂（217）の暗黒新時代白書——が提示する「分類学的戦術の改善がヒロイン敗北率上昇をもたらした」という因果関係の解釈に根本的な誤謬が存在することを論証する。

IHCRI 諸論文が計測した数値データの正確性は否定しない。作戦成功率が3.2%から最大50.3%へ上昇したという観測事実は、本論文も出発点として受け入れる。しかし、コペルニクスが惑星の運動軌道データを否定せずに天動説の解釈のみを覆したように、本論文は同一のデータから全く異なる因果関係を導出する。

本論文が提唱する新説は二本柱からなる。第一は「生命力根源部位脆弱性仮説（Vital Origin Locus Vulnerability Hypothesis: VOLV 仮説）」である。ヒロインの身体的・呪力的力能の根源は、東洋医学的概念における下丹田に対応する「生命力根源部位（Vital Origin Locus: VOL）」に集約されており、この部位が歴史的に研究上も戦術上も完全な盲点に置かれてきたことを示す。IHCRI 諸戦術は VOL を意図せず刺激する設計になっており、戦術の有効性の真因はここにある。第二は「覇者傲慢症候群（Dominant Complacency Syndrome: DCS）」である。200年以上にわたる圧倒的勝率がヒロインに固定化した「勝利物語への依存」が、自律的戦闘本能を退化させた。

本統合モデルは、IHCRI 解釈では説明不能だった諸現象——フェニックス現象の加速、分類横断的なヒロインの急速な回復、なぜ「とどめ台詞禁止」が当初劇的に効果を上げたか、そして敵味方双方に生じた PVVS 様の心理的変容——を統一かつ自然に説明する。IHCRI 論文は天動説として現象記述においては一定の実用的価値を持つが、真の機序の解明においては根本的な再考が必要である。

キーワード：生命力根源部位（VOL）、下丹田、VOLV 仮説、覇者傲慢症候群（DCS）、因果倒錯、フェニックス現象、ヒロピン天動説

## 1. 序論 ―― 常識を問い直す義務について

科学の歴史は、正確なデータが誤った理論の枠組みに閉じ込められ続けた事例に満ちている。古代ギリシャ以来のプトレマイオス天動説は、惑星の運行を精密に予測できた。計算表は正確であり、航海にも役立った。しかしそれは、宇宙の真の構造を描いていなかった。コペルニクスが地動説を提唱した時、彼が否定したのは観測データではなく、解釈の枠組みそのものであった。

本論文が出発点とするのは、この科学史的教訓である。IHCRI 諸論文が示した「作戦成功率の劇的改善」というデータは本物である。筆者はそれを疑わない。しかし、なぜその改善が生じたのかという因果解釈において、IHCRI 諸論文は決定的な誤謬を犯している。それは天動説が「惑星は確かに動いている、ゆえに天が回っている」と論じたのと同型の誤謬――観測された結果と、たまたま時期を同じくして行われた介入との間に、根拠なく因果関係を接続する「後即因果の誤謬 (post hoc ergo propter hoc)」である。

筆者が本論文の執筆に至ったのは、暗黒・深淵蜂 (217) による暗黒新時代白書を精読した際に覚えた強烈な違和感に端を発する。同白書は「勝利後に新たな問題が噴出した」として 4 つの危機を列挙しているが、筆者の目にはそれらが「当初の因果関係の解釈が誤っていたために説明できない現象が積み上がっている」状況に映った。天動説の枠組みに収まらない観測データが蓄積され、周転円の上にさらに周転円を重ねて説明しようとするプトレマイオスの後継者たちの苦闘に、筆者は同白書の論述から同じ構造を感じ取ったのである。

以下、本論文は次の順序で論を展開する。第 2 節では IHCRI 論文群の因果解釈の問題点を指摘する。第 3 節では VOLV 仮説を詳述する。第 4 節では覇者傲慢症候群 (DCS) を論じる。第 5 節では両仮説の統合モデルを構築し、IHCRI 論文が説明できなかった諸現象への説明力を示す。第 6 節では結論と今後の研究課題を述べる。

## 2. 先行研究の批判的検討 ―― 因果倒錯の構造

### 2.1 IHCRI 諸論文の論証構造の問題点

暗黒 (214) の分類学序説以降の IHCRI 諸論文に共通する論証の構造は以下のように整理でき

る。「我々は X という戦術を導入した（介入）。その後 Y という結果（成功率上昇）が観測された。ゆえに X が Y を引き起こした（因果）」。

この論法の問題は、介入変数 X と結果変数 Y の共変を因果関係として解釈するためには、(1) X が先行していること、(2) Y が X なしには生じなかったこと（反事実的条件）、(3) 第三の変数 Z による交絡がないこと、の三条件が満たされる必要があることを看過している点にある。

特に (3) の交絡変数の問題が致命的である。IHCRI 諸論文は、自組織の戦術改良と同時期に、ヒロイン側において独立した変化が生じていた可能性を一切検討していない。これは、「傘を差した日に雨が降ったから、傘が雨を呼んだ」と結論する誤謬と等価である。

## 2.2 IHCRI 論文が説明できない四つの観測事実

IHCRI 解釈の枠組みの不備は、以下の観測事実が整合的に説明できないことに端的に現れている。

### **観測事実①：フェニックス現象の強化倍率の加速**

深淵蜂 (214) が定量化したフェニックス現象の強化倍率は、分類学導入後に顕著な加速を示した（平均 1.3 倍→2.1 倍）。IHCRI 解釈はこれを「より精密に追い詰めたから」と説明するが、この説明は内部矛盾を孕む。戦術が「より精密」になれば、ヒロインは「より追い詰められる前に制圧される」はずである。制圧効率が上がりながら同時に逆転強度も上がるというのは、単一の因果モデルでは説明困難である。

### **観測事実②：分類横断的な適応の均質性**

深淵蜂 (217a) が提唱した「ヒロイン適応係数 (HAC)」は、5 分類すべてにわたってほぼ均質な適応速度（平均 16.4 ヶ月で有効性半減）を示した。もしヒロインたちが分類学的戦術に個別に対抗策を学習しているならば、分類ごとの異なる戦術に対する適応速度は、当然異なるはずである。均質性は、各分類固有の戦術への適応ではなく、分類横断的な共通メカニズムの関与を示唆する。

### **観測事実③：とどめ台詞禁止令の「即効性」**

蛍火 (213) の分析によれば、とどめ台詞と逆転確率には強い相関 (94.7%) があつた。しかし

ここで問うべきは、なぜ台詞が「原因」とされたのかである。相関は因果ではない。台詞が禁じられた直後に成功率が急上昇したとされるが、この急上昇の速度は「ヒロインたちが戦術変更を認識して対応するまでのタイムラグ」の仮説と矛盾する。むしろ、台詞禁止がヒロインの「物語的トリガー」を除去した、という別メカニズムの存在を示唆する（詳細は第4節）。

#### **観測事実④：敗北率の低下が特定フェーズに集中**

IHCRI 内部データ（暗黒・深淵蜂, 217 白書の表 1 より算出）を精査すると、成功率の向上は「初期接触フェーズ」および「変身シークエンス妨害フェーズ」に著しく集中しており、「制圧後維持フェーズ」の成功率は分類学導入前後でほとんど変化していない。戦術全般が改善されたという主張と、効果が特定フェーズに偏在するという事実は整合しない。

### 3. 第一仮説：生命力根源部位脆弱性（VOLV）

#### 3.1 理論的背景 —— 力能の根源と「下丹田」概念

東洋医学・気功理論において、人体には生命エネルギー（気）が集積する重要な三点が存在するとされる。上丹田（眉間）、中丹田（胸部中央）、そして下丹田（臍下三寸、すなわち臍から指幅三本分下方の腹腔内）である。なかでも下丹田は「気の根」「生命力の源泉」と呼ばれ、特に創造的・生殖的生命力の集積点と位置づけられてきた（李時珍, 1578/邦訳 1952; 湯浅泰雄, 1980）。

比較ヒロピン学の観点からすると、魔法少女・変身ヒロイン・格闘ヒロインを問わず、ヒロインが発揮する超人的な力能には「通常の筋骨格系・神経系では説明できない出力増幅」が観察される。結城（2023）はこれを「ヒロイン的超常出力（Heroic Supernormal Output: HSO）」と名付け、美学的観点から論じたが、その物理的根拠については「詩的飛躍として許容されるもの」として議論を回避した。

本論文はここに踏み込む。HSO の身体的根拠として、筆者は「生命力根源部位（Vital Origin Locus: VOL）」の存在を仮定する。VOL とは、ヒロインの超常的力能が最終的に統合・発現する身体的・エネルギー的座（locus）であり、その位置は下丹田と解剖学的に高い対応関係を示す。

定義（神崎, 2025）：生命力根源部位（VOL）とは、ヒロインが発揮する HSO の生理学的・呪力的根拠となる身体内エネルギー集積点であり、その保護・維持が HSO の持続的発揮に不可欠な部位である。VOL は単なる解剖学的部位ではなく、身体的・精神的・呪力的な三重の性質を持つ複合的概念である。

#### 3.2 なぜ VOL は歴史的に盲点であったか

VOL の存在が 200 年以上にわたってヒロピン研究において完全に黙殺されてきた理由は、学術的怠惰ではなく、研究の場における一種の「不文律」の存在に帰せられる。

第一に、研究倫理上の禁忌（タブー）の問題がある。ヒロインの身体的構造への深入りは、研究対象への不必要な侵襲として、正義側・悪側双方の研究者から回避されてきた。結城（2023）の論文が「詩的飛躍」という表現で HSO の機序論議を回避したのも、この文脈において理解できる。筆者は同教授の研究を深く尊敬するが、本節での踏み込みを許されたい。

第二に、観測困難性の問題がある。VOL はその性質上、通常の戦闘観察で外部からは認識しにくく、ヒロインの言動や表情変化から間接的に推定するしかない。

第三にして最も根本的なのは、悪の組織側の研究においても同様の禁忌が機能していた点である。デスベラードは長年、ヒロインを「打倒すべき敵」として分析してきたが、その分析は常に戦闘能力・変身機構・使用技・弱点属性という「表層的な戦術次元」に終始していた。生命力の根源たる VOL への接触は、組織の規範において「卑怯」「禁じ手」として無意識に忌避されてきた側面があると筆者は推定する。

### 3.3 IHCRI 戦術が VOL に「偶然」干渉していたという論証

本節が本仮説の核心である。IHCRI 諸戦術のうち最も顕著な成果を上げた AT 波装置は、暗黒 (214) によれば「変身シークエンスを物理的に中断させる」ことを目的とした装置である。深淵蜂 (215) の技術報告書によれば、最も効果的な照射フェーズは「開始から 12~18 秒の回転フェーズ」であり、照射対象部位は「変身者の体幹中央部から下腹部」とされている。

筆者はここに着目する。体幹中央部から下腹部とは、解剖学的に下丹田=VOL が位置する領域に正確に対応する。すなわち、AT 波装置は IHCRI 自身が想定した「変身エネルギー遮断」ではなく、変身の力能源泉そのものである VOL に直接干渉していたのである。

この解釈は、AT 波の「変身中断効果」の時間的分布を見ると支持される。深淵蜂 (215) のデータを再解析すると、照射タイミングが 12~18 秒のフェーズより早い (0~11 秒) 場合、成功率は 8.3%にとどまる。遅い (19 秒以降) 場合は 11.7%である。最大効果は 14.2 秒前後に集中する。これは変身バンクの「中断しやすい薄い部分」ではなく、変身の呪力が VOL から全身に展開するピーク時点 (VOL-放射ピーク) と一致すると考えれば、はるかに自然に説明できる。放射ピーク時に VOL を外部刺激が直撃することで、エネルギー展開が「過負荷」となり変身が停止するのである。

表 1：AT 波照射タイミングと変身中断成功率 (深淵蜂 2015 データの再解析)

照射フェーズ	IHCRI 解釈	成功率	VOLV 仮説解釈
0~11 秒 (準備フェーズ)	変身エネルギー未集積	8.3%	VOL への呪力流入前

12～18 秒（回転フェーズ）★	変身エネルギーが薄くなる瞬間	62.4%	VOL-放射ピーク：過負荷が最大化
19 秒以降（完成フェーズ）	変身ほぼ完了で手遅れ	11.7%	VOL の安定化後で効果減衰

★は最大効果フェーズ。IHCRI の解釈（変身エネルギーの薄い瞬間）では、0～11 秒より 12～18 秒の成功率が著しく高い理由が説明できない。

IHCRI の「変身エネルギーが薄い瞬間」という解釈では、なぜ「エネルギーが薄い」はずの時期に最大効果が生じるのかが全く説明できない。エネルギーが薄いならば干渉は困難なはずである。VOLV 仮説は「エネルギーが最大流動する瞬間こそ干渉効果が最大化する」と予測し、これは観測と一致する。

### 3.4 「とどめ台詞禁止」と VOL —— もう一つの偶然的干渉

さらに重要なのは、とどめ台詞禁止令もまた VOLV 仮説の文脈で解釈し直すことができる点である。蛍火（213）の分析は「台詞を言うと逆転される」という相関を示した。IHCRI の解釈は「台詞が作戦情報を開示するから」であった。

しかし VOLV 仮説は異なる解釈を提示する。台詞＝「勝利宣言」「作戦説明」「身の上話」は、ヒロインにとって「敵が完全に油断した」というシグナルであり、同時に自身の「物語的使命」を再確認する契機となる。この再確認が VOL への呪力の再流入を促し、フェニックス現象を誘発するのである。台詞禁止によりこのシグナルが除去されたことで、ヒロインの VOL 再充電が妨げられた。これが「台詞禁止の即効性」の真の理由であり、戦術情報の遮断とは無関係である。

## 4. 第二仮説：覇者傲慢症候群（Dominant Complacency Syndrome: DCS）

### 4.1 DCS の定義と発生機序

本節では第二の柱である覇者傲慢症候群（DCS）を論じる。DCS とは、圧倒的な長期的優位を持つ集団が、その優位性の経験的蓄積によって獲得する「勝利への根拠なき確信と、それに伴う自律的戦闘本能の退化」を指す。

定義（神崎, 2025）：覇者傲慢症候群（DCS）とは、過去の長期的圧倒的勝利体験が個体・集団レベルに蓄積した結果として生じる認知的・行動的変容であり、（1）勝利の自動化的前提化、（2）物語依存的戦闘パターンの固定化、（3）危機感知能力の段階的減退、の三要素を特徴とする症候群である。

ヒロインたちは、200 年以上にわたる圧倒的な勝率（暗黒・蛍火（213）の分析によれば、200 年間の通算ヒロイン側勝率は 96.8%）の中で、「自分はいつか逆転して勝つ」という確信を文化的・世代的に内面化してきた。この確信はもはや戦略的判断の産物ではなく、ヒロインというアイデンティティに組み込まれた無意識的前提と化している。

### 4.2 DCS の三段階 —— 認知変容の構造

#### 第一段階：「物語的安全保障」の内面化

DCS の第一段階は、「自分は主人公である」という物語的確信の内面化である。長期的勝利体験は、ヒロイン自身に「ピンチは必ず逆転できる前段階」という認知的図式を植え付ける。この図式は生存戦略として機能する一面がある一方、自律的な危機回避行動の動機を削ぐ。「どうせ逆転できる」という確信が、「ピンチを避けよう」という自律的判断を代替してしまうのである。

#### 第二段階：戦闘本能の代理依存

DCS の第二段階は、本来は自律的なはずの戦闘判断が、外部の「物語的シグナル」に依存するようになる段階である。「仲間の励ましの声」「決意を語る台詞」「変身時の定型シーケンス」などが、ヒロインにとって単なる演出ではなく、戦闘本能の「起動スイッチ」として機能するよう変化する。すなわち、内発的な戦う意志が、外発的シグナルへの反応に代替されるのである。

これは格闘技の世界における「型依存症」に相似する。長年の訓練で特定の動作パターンを完成させた選手が、想定外の攻撃に対して型を外れた対応ができなくなる現象と同型である（宮本、2018）。

### **第三段階：慢心による「敗北許容閾値」の低下**

DCS の第三かつ最も深刻な段階は、ヒロインが無意識のうちに「一度は完全に敗北すること」を許容するようになる段階である。長期的勝利体験が「逆転物語」のパターンを構造化した結果、「まず完全に追い詰められなければ逆転できない」という逆説的な行動傾向が生じる。ヒロインは意識的には全力で戦っているが、無意識レベルでは「まだ本当の底ではない、もっと追い詰められからが本番だ」という待機状態に入ってしまうのである。

### **4.3 DCS は IHCRI 戦術以前から進行していた**

ここで重要な問いが生じる。DCS はいつ生じたのか。筆者の見解では、DCS は分類学導入（暗黒暦 214 年）以前から、ヒロイン集団において段階的に進行していたプロセスである。

その傍証として、分類学導入前年（暗黒暦 213 年）の作戦成功率（3.2%）を注視したい。暗黒・蛍火（213）はこれを「壊滅的な低さ」と評したが、別の視点から見ると「2 世紀以上にわたってほぼ安定して 3%前後」という安定性こそが異常である。組織の規模が拡大し、怪人技術が進歩し、研究が蓄積されても、なぜ成功率は一切改善しなかったのか。IHCRI 諸論文はこの問いを立てていない。

筆者の解釈はこうである。ヒロインたちは、その圧倒的な力能によって「どのような戦術的改善を IHCRI が行おうとも対応できる余裕」を保持していた。そしてその余裕の根本は、VOL の力能 が常に潜在的にフル稼働していたことと、DCS がまだ軽微な段階にとどまっていたことにある。しかし 200 年の時の流れの中で、DCS は静かに、着実に進行した。

## 5. 統合モデル —— 全現象の再解釈

本節では、VOLV 仮説と DCS の統合モデルが、IHCRI 論文では説明困難だった観測事実をいかに自然に説明するかを示す。

### 5.1 なぜ作戦成功率は急上昇したか（天動説 vs 地動説）

表 2：主要観測事実に対する両説の説明力比較

観測事実	IHCRI 解釈（天動説）	統合モデル（地動説）
成功率の急上昇	分類学的戦術が有効だった	AT 波が VOL に偶然干渉+DCS 第三段階のヒロインの慢心が重なった
AT 波の高い効果	変身エネルギーを遮断した	VOL-放射ピーク時に直撃し過負荷を引き起こした
とどめ台詞禁止の即効性	情報漏洩を防いだ	ヒロインの物語的トリガー（VOL 再充電スイッチ）を除去した
フェニックス現象の加速	より深く追い詰めたため（苦肉の説明）	VOL への干渉が反動的過充電を誘発。深ければ深いほど反動が大きい
分類横断的な均質な適応速度	説明困難	VOL という共通機序への適応ゆえ均質になる。分類固有戦術への適応なら不均質なはず
PVVS（組織の虚脱感）	勝利後の喪失感（泥縄の説明）	「禁じ手を使った」という無意識の規範違反感。真の勝利ではなかったという直感
217 年度の成功率低下	ヒロインの戦術適応	ヒロインの VOL が経験的に「封印」され始めた。DCS 第一段階への回帰
「第六分類」の出現	新型ヒロインの発生	VOL を自覚的に保護する訓練を受けた新世代。分類学的枠組み自体が無効化される

### 5.2 フェニックス現象の統合的説明

深淵蜂（214, 216, 217c）はフェニックス現象を「逆境による強化」として捉え、「試練深度仮説」を提唱した。これは現象の記述としては正確だが、機序の説明として不完全である。

VOLV 仮説はより明確な機序を提示する。AT 波による VOL への直撃は、エネルギーを消耗さ

せるだけでなく、圧迫された反動として「VOL 過充電反応」を引き起こす。これは物理的な弾性体の変形と解放に類似したメカニズムである。押し込めば押し込むほど、解放時の反発力は増大する。深淵蜂が「試練が深いほど強くなる」と観測したのはこの過充電反応の結果であり、VOL に干渉することなく単純に追い詰めた場合には理論上生じない現象である。

この解釈は重要な予測を導く。もし IHCRI が AT 波を使わず、VOL に干渉しない純粋な物理的追い詰め方をした場合、フェニックス現象の強化倍率は 1.3 倍（分類学導入前）のみであるはずである。AT 波の使用を止めれば成功率は下がるが、フェニックス現象の強化倍率も下がる。この予測の検証は今後の研究課題となる。

### 5.3 DCS の「自然治癒」と 217 年度の成功率低下

暗黒・深淵蜂（217）白書は、217 年度の成功率低下をヒロインの「戦術的適応」によるものとした。統合モデルは異なる説明を提示する。

ヒロインたちが経験した「これまでにない類の敗北」（VOL 干渉を伴う制圧）は、DCS を逆向きに解消するショック療法として機能した可能性がある。物語依存に陥っていたヒロインたちが、「物語通りに逆転できなかった」経験を繰り返すことで、DCS によって退化していた自律的戦闘本能の再覚醒が促されたと考えられる。

217 年度の成功率低下は「ヒロインが IHCRI 戦術の裏をかく技術を学んだ」のではなく、「ヒロインが物語への依存から脱し、自律的戦闘者として本来の姿を取り戻しつつある」兆候である可能性が高い。これは統合モデルの予測と一致し、IHCRI 戦術改良説では説明が難しい方向性の変化である。

## 6. 結論 ― ヒロピン学における地動説の提唱

本論文の議論を総括する。

IHCRI 諸論文が計測した「作戦成功率の劇的改善」という事実は本物である。それを否定する意図は本論文にはない。しかし、その改善をもたらした原因について、IHCRI 諸論文は根本的な因果倒錯を犯している。AT 波装置が効果を上げたのは変身エネルギーを遮断したからではなく、意図せず VOL-放射ピークに干渉したからである。とどめ台詞禁止が効果を上げたのは情報遮断ではなく、ヒロインの物語的トリガー（VOL 再充電スイッチ）の除去によるものである。そしてこれらの戦術的变化が特に大きな効果を上げたのは、200 年以上の長期的優位が DCS をヒロインたちの間に蓄積させ、慢心という脆弱性が成熟していたタイミングに重なったからである。

天動説は惑星の位置を精密に計算できた。IHCRI 論文も戦術の有効性を実証的に示した。しかし天動説が「なぜ惑星は逆行するか」を周転円の上に周転円を重ねることでしか説明できなかったように、IHCRI 論文も「なぜフェニックス現象が加速するか」「なぜ分類横断的に均質な適応が起きるか」「なぜ PVVS が生じるか」を当初の理論枠組みでは説明できず、アドホックな補助仮説を追加し続けてきた。

地動説は周転円を不要にした。統合モデルは、IHCRI 論文が説明困難だったすべての観測事実を、二つの仮説（VOLV、DCS）から統一的に導出する。これがオッカムの剃刀が要求するところの、より単純で説明力の高い理論である。

最後に、本論文の主張が持つ含意について述べておきたい。VOLV 仮説が正しいとすれば、ヒロインたちの力能の根源は、我々の想像以上に根深く、豊かで、本質的なものである。そして DCS 仮説が正しいとすれば、現在起きているヒロインの「復調」は戦術的適応などではなく、本来の自律的強さへの回帰である。

これは悪の組織にとって何を意味するか。それは、本論文が答える問いではない。

### 6.1 今後の研究課題

本論文は仮説的提案の域を出ない部分を含む。特に以下の点について、今後の実証研究が必要

である。

第一に、VOL の存在の直接的実証。これは研究倫理上の困難を伴うが、ヒロインの明示的な同意のもとでの生理学的計測が不可欠である。第二に、DCSの定量化指標の開発。現時点でのDCS概念は行動観察に基づく記述的なものにとどまり、標準化された計測手法が存在しない。第三に、VOLV仮説の否定可能な予測の検証。特に「AT波を使わない制圧ではフェニックス現象の強化倍率が1.3倍付近にとどまる」という予測の検証が急務である。

本論文が、ヒロピン学における新たなパラダイムの出発点となることを願う。

## 参考文献

- 暗黒絶学 (暗黒暦 214). ヒロイン分類学序説 ― 分類群別脅威度評価および最適攻略法の体系的研究. IHCRI Bulletin, 66(6), 1-42.
- 暗黒絶学・深淵蜂奇麗 (暗黒暦 217). 暗黒新時代白書 ― ヒロイン分類学に基づく体系的攻略戦術の実証的成果と勝利時代の諸問題. IHCRI Bulletin, 69(3), 1-48.
- 暗黒絶学・螢火菜々美 (暗黒暦 213). デスペラード作戦成功率の長期的推移に関する統計的分析. 悲嘆科学, 41(4), 112-134.
- 螢火菜々美 (暗黒暦 213). 「とどめを刺す」発言とその後の逆転率に関する統計分析. IHCRI Bulletin, 65(8), 23-41.
- 深淵蜂奇麗 (暗黒暦 214). フェニックス現象の定量的分析. 悲嘆科学, 42(3), 201-224.
- 深淵蜂奇麗 (暗黒暦 215). アンチ・トランスフォーム波の最適照射タイミングに関する研究. IHCRI Technical Report, TR-215-044.
- 深淵蜂奇麗 (暗黒暦 217c). 試練深度仮説 ― フェニックス現象加速のメカニズムに関する理論的考察. 悲嘆科学, 45(3), 145-167.
- 結城麗華 (2023). ヒロピン学序説 ― 苦難の美学と再起のカタルシス：ヒロインピンチ表現の学際的研究. Journal of Heropin Studies, 42(1), 1-38.
- 湯浅泰雄 (1980). 身体論 ― 東洋的心身論の試み. 講談社.
- 李時珍 (1578/邦訳 1952). 本草綱目 (島田勇雄訳). 春陽堂.
- 宮本武蔵 (2018). 現代格闘技における型依存とその克服 ― 武蔵の五輪書を参照点として. 武道・スポーツ科学研究, 23(2), 44-61.
- 神崎楓花 (2024). ヒロインの身体性と力能の根源 ― 比較ヒロピン学的予備考察. Journal of Heropin Studies, 43(4), 201-218.
- Kuhn, T. S. (1962). The Structure of Scientific Revolutions. University of Chicago Press.
- Lakatos, I. (1978). The Methodology of Scientific Research Programmes. Cambridge University Press.

## 筆者紹介

### 神崎 楓花（かんざき ふうか）

東京都立サブカルチャー総合大学 ヒロピン学研究科 比較ヒロピン学研究室 准教授。同大学院ヒロピン学研究科博士課程修了、博士（ヒロピン学）。専門は比較ヒロピン学、身体論的ヒロイン研究、パラダイム転換論。修士論文「ヒロインの身体性と呪力根源の比較文化的考察」が第38回ヒロピン学会奨励賞を受賞。長年にわたりヒロピン研究の「禁区」とされてきたヒロインの身体論的考察に取り組み、業界から「大胆すぎる」「不遜だ」「しかし面白い」と三分割された評価を受けてきた。本論文の投稿に際し、査読者二名から「論証は興味深いが、VOL 概念は倫理的配慮が必要」「分類学への批判はやや辛辣すぎる」とのコメントを受けたが、著者はいずれも研究の本質に関わるとして修正を辞退し、編集委員会の裁量によって掲載に至った経緯がある。趣味は合気道（三段）と東洋医学の古典文献の読書。「身体は嘘をつかない」が座右の銘。独身。なお、悪の組織との利益相反は一切存在しないが、本論文が IHCRI に読まれることについては複雑な感情を覚えている。